群像の歩

〔上〕

堺屋太一

群像〔上〕

堺屋太一

日本放送出版協会

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

峠の群像（上）

定価一、〇〇〇円

昭和五十六年十一月二十日　第一刷発行

著者　堺屋太一

発行者　藤根井和夫

印刷
製本　凸版印刷株式会社

発行所　日本放送出版協会
郵便番号一五〇
東京都渋谷区宇田川町四一一一
振替　東京一一四九七〇一

検印廃止

（落丁本・乱丁本はお取替いたします）

©1981　Taichi Sakaiya　Printed in Japan
ISBN4-14-005100-0　C 0393 ¥1000E

目次

プロローグ……5
第一部　時の峠に……25
一　泰平百年……27
二　赤穂浅野家……53
三　大坂……88
四　塩……121
五　将軍……166
六　家老……190
七　思入れ……214
八　松山城接収……243
九　黄門と側用人……269
十　雨……300
十一　元禄の秋……346

カバー・扉　村上　豊

装幀　土方弘克

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

峠の群像

(上)

この時の峠で
　人はみな
それぞれに生き
それぞれに悩んだ
　だが時は
ひたすらに下り坂を行き
ただ一つの評価を残した

プロローグ

「どけどけ、どいてくれい……」

大声で叫びながら男が走る。

着古した紺地の袷にすり減った草履、髷は歪みさかやきは五分ほども伸びている。腰には黒鞘の脇差を、左手にはもう一本、朱鞘の長刀を握っている。年の頃は二十五、六。親の代からの長い浪人生活に耐えて来た貧しさがにじんでいる。

だが、襟の間からのぞく胸元も、からげた裾から突き出した両の脚もたくましい。表情は引き締り、太い眉の下の目は希望と興奮に輝いている。浪人者には滅多にめぐり合えない緊急非常の用件で急いでいることは、だれの目にも分る。

「どけどけ、どいてくれい……」

浪人は、同じ言葉を繰り返しながら走った。厳しい表情に似つかぬ明るい声が、この若い男の一途な性格を現わしているようでもある。

早春二月十一日昼の四ツ半（新暦では三月十八日午前十一時頃）、場所は江戸牛込天龍寺通り。江戸といっても北のはずれの新開地。道は狭く、両側の家並みは軒が低い。職人、行商人、日雇い、やもめ暮しの浪人や後家の住む貧弱な長屋の列に、もの売りの小店と飲食を商う屋台が混る街だ。通りといっても幅一間あまり、道というよりは小屋の間に残された湿っぽい路地という方がふさわしい。

この狭い所に、両側の家人が箱や板や七輪を出している。女や子供、老人、それに仕事にあぶれた男たちが何とはなしにたむろしている。元禄中頃（十七世紀末）の江戸の町人街は、何とも猥雑だ。騎馬や早駕籠が行く場合には、「どけどけ」と叫ぶ先駆けが欠かせなかったほどである。

浪人の叫びに女たちはうろたえた。子供や老人が驚いた。路上に寝そべっている犬どもも、久し振りに見る威勢のよい人間に仰天して道を空けた。たった一人の男が駆け抜けただけで、狭い通りにはちょっとした波紋が起った。

「ありゃあ、竹町（現新宿区納戸町）の中山やすべえさんじゃねえかねえ……」

端切れを洗張りの板に貼り付けていた女が浪人の後姿にそんな声を発した。「安兵衛」――当時の正しい読み方は「やすひょうえ」だが、女は気安く「やすべえ」といった。貧しい浪人と貧しい町人の間には身分的な差別観は存在しない。大抵の浪人は、やがて町人になるのだ。

「そうだかなあ、何を急いでなさるのやら……」

低い軒下にしゃがみ込んだ老人が、首だけ伸して浪人の背を目で追いつつ呟いた。

「そうじゃろが、ありゃあ……」

女は、何秒間か浪人のあとを見ていたが、やがて手桶の端切れを把み上げて板に貼る作業に戻っ

た。老人は首をすくめ、犬は路上の陽だまりに戻った。浪人中山安兵衛の巻き起した波紋は消えようとしていた。

しかし、それからしばらくすると、逆の方向、つまり浪人の走って行った西の方から、ざわめきが伝わって来た。それはやがて「喧嘩だ、喧嘩だ」という声にまとまった。

「喧嘩だ、喧嘩だ……」

「斬合いじゃ、高田馬場で斬合いがはじまったぞ……」

西の方から伝わって来た騒音は、数分にしてこれだけの情報に変った。

「何、喧嘩じゃと……」

「侍同士が斬り合っておると……」

人々は一斉に叫びわめいた。男も女も、まずは顔を見合せ、次には申し合せたように西の方を見た。十町以上も離れた高田馬場が見えるはずもないのに、みな背と首を伸していた。どの顔も悲劇を予想した暗い表情を作っていたが、どの目も興味と好奇心に輝いていた。平和で退屈で貧しい日々に飽き飽きしている人々にとって、武士の斬合いはまたとない刺激的な事件だ。

「見に行こうか……」

仕事にあぶれた日雇いがまず、遠慮がちに囁いた。

「うん、行こうや……」

老人がうなずいた。

「では、拙者も参るか」

浪人者が身をひねって歩き出した。

たちまちにして数人の集団ができ、すぐこれに、より多勢が続いた。女も子供も加わり、人は列を成した。途中でも、次々と加わる者があり、列は前にも後にも伸びた。そしてそれに従って、人々の歩みは速まり、やがて小走りに駆ける者が出た。そしてそれが好奇心と競争心を解放し、群集心理を掻き立てた。人々はみな、「喧嘩だ」「斬合いだ」と叫びながら走り出していた。

「高田馬場で斬合い」というニュースは、この間にも拡まっていた。四谷から市ケ谷、麹町へと伝わるのにもさして時間はかからない。小石川牛天神下の堀内源左衛門道場に報されるまでにも十分とはかからなかった。

ここでの反応も、牛込の日雇いたちのそれとさして変らない。木刀を振っていた武士たちも、まず遠慮がちに顔を見合せ、やがて「見に行こう」と囁き合った。道場の中央で木槍を振り廻していた若い武士もその一人だった。

「我らも参ろうか。後学のためにもなろう……」

若い武士、播州浅野家馬廻役の高田郡兵衛は、壁際にいた白髪混りの男をかえり見てそう誘った。

「おお、参ろうとも。またとなき好機じゃ」

白髪混りの男、同じ家中で江戸詰武具奉行を勤める奥田孫大夫（兵左衛門）も、すぐ同意した。もうその頃には、何人かの者が玄関口から跳び出していた。

堀内道場を出た高田と奥田は、急ぎ足に歩いた。だが、行くほどに同行者が増え、気が急いた。彼らの唯一の心配は、現場に着くまでに斬合いが終ってしまうことだ。やがて、彼らも、多くの同

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

行者と同じように走り出した。

小石川牛天神から高田馬場までの道を走り抜くのは容易ではない。武術で鍛えた高田や奥田も息が切れ、足が鈍った。多くの競争者も同じに見えた。その中を、軽やかに駆け抜けて行く者がいた。紺色半纏に紅脚絆という派手な服装の男だ。

「ほい、御免よ、お先にどうも……」

「そら、右側通して、有難とさん……」

半纏の男は、おどけた口調でそんなことをいいながら、巧みに人を避けて駆け抜けて行く。

「やっぱり……飛脚は速いのお……」

遅れ気味の奥田孫大夫が、途切れ途切れに声をかけた。追い抜いて行った男の背に、丸に「伝」の字の印があったからだ。これは、上方と江戸を結ぶ伝馬町の飛脚屋「飛伝」の商標である。

「そりゃあ、走るのが商売だからのお……」

幾分余裕のある高田郡兵衛は、後の奥田に慰め顔で応じた。この時、二人を追い抜いて行ったのは「飛伝」の次男坊伝平である。

世にいう「高田馬場の決闘」はこのようにしてはじまった、と通説ではいわれている。

高田馬場は、現在の戸塚二丁目交叉点辺りから東へ拡がる田畑の中にあった。西の方には土手があり、中央にも中の土手通りと呼ぶ低い盛土がある。北側は神田川岸に降りる下り坂に続き、東側には木立が並んでいたという。ここで決闘が行われたのは、元禄七年（一六九四年）旧暦二月十一日のことだ。

事の発端は、松平右京大夫頼純（伊予西条三万石）の家来、菅野六郎左衛門と村上庄左衛門が、組頭方での年始振舞いの席で口論したことだ。これが四日前の二月七日だというから両者の間に深い因縁や特別の利害対立があったわけではないらしいが、とに角、両人は高田馬場での果合いを約束した。武士の間にありがちな意地の張合いがこんな大事になったのだろう。

ところが、村上庄左衛門には弟二人があり、家来共六、七人も連れて来ると予想されたのに、菅野六郎左衛門は孤独、その上六十余の高齢だった。不利を覚悟した菅野は、堀内道場で知り合い伯父甥の義を結んでいた中山安兵衛（のちの堀部安兵衛）を訪ね、「万一我等討たれ候はば、貴殿事、跡の妻子等引き受け、又は敵を討ち給はる可し」と願い出た。これを知った安兵衛は、「あとで仇討ちなどするよりは今助太刀する方がよい」と高田馬場に同行したのだ。俗説に伝えられるように、事件を聞いて駆け付けたのではないらしい。

戦いの経過は、中山安兵衛自身が、死んだ菅野六郎左衛門に代って松平家に提出した決闘始末の報告書に詳しい。それによると、村上方は兄弟三人、菅野方は六郎左衛門と安兵衛、それに菅野の若党、草履取りがいたが、これは偵察行為以上には戦闘に加わらなかったらしい。戦いは、菅野六郎左衛門と村上庄左衛門が渡り合い、中山安兵衛と村上の弟三郎右衛門が斬り合った。安兵衛は、三郎右衛門の太刀を二度までも鍔で受け止めた上、踏み込んで真正面から眉間を打ち割った。ちょうどその時、十間ほど離れた所で、菅野が眉間を斬られた。安兵衛がはっとして駆け付けると、これに力を得た菅野が反撃に出て、村上の左右の手を打ちおとした。かなわじと見た村上は「ならぬならぬ」といいながら逃げようとしたが、安兵衛は「ならぬとは」と叫んで眉間を打ち込み、西の土手に斬り伏せた。そのあと、村上のもう一人の弟中津川祐見も打ち倒した。しかし、菅野六郎左

衛門も、眉間を斬られた傷で死亡した、という。

巷説にいう「高田馬場の十八人斬り」とは違い、中山安兵衛が斬ったというのは三人だ。しかもそのうちの一人は両手を負傷したあとで斬ったらしい。中津川祐見は針医者だというから、大した腕ではなかったようだが、三郎右衛門との戦いはかなりの激闘だったことが分る。いずれにしろ、道場友達で義盟を結んだという程度で不利な決闘の助太刀を買って出たのだから、中山安兵衛という男は、相当な勇み肌だったのに違いない。

高田郡兵衛と奥田孫大夫が高田馬場に着いた時、決闘はもう終っていた。二人は中の土手に駆け上り、周囲の人々に、

「いかがでござった……」

と訊ねてみたが、みな黙って首を振るばかりだ。ここに集った大勢の人々の中でも、実際に斬り合う瞬間を見た者は僅かだった。決闘は、長い睨合いと短い刃合せで終ったのであろう。

それでも、決闘者らしき人影がまだ西の土手の辺りに見えた。

〈どうやら勝った方からも怪我人が出たらしい……〉

と、高田郡兵衛は思った。倒れている人物の上にかがみ込んでいる男の動作が、そのことを示している。

やがて、青ざめた若党が二人、戸板を担いで来て、怪我人を載せにかかり、かがみ込んでいた男もふらふらと立ち上った。これが唯一人の生き残った勝利者に違いない。だが、勝利の美名にそぐわぬひどい格好だ。身には黒っぽい袷をひっかけているだけで、帯も締めていない。顔は血の気が

失せ、目は虚(うつろ)だ。はだけた胸元も、むき出しの脚も、返り血と泥に汚れている。乱れた髪が顔にも肩にもかかり、五分ばかり伸びたさかやきが汚ならしい。

「やっぱり、人を斬るのは大変なんだなあ……」

と、郡兵衛は心のうちで呟いた。槍の上手と賛えられるこの男も、人を斬った経験は一度もない。見るのさえ今はじめてだ。元禄時代の武士は、大抵がそうである。

「ああ、あれは……中山氏(うじ)……」

突然、背後で奥田孫大夫の素頓狂な声がした。

「何、中山……」

郡兵衛は、奥田の方を振り返った。

「確かに……あれは、中山安兵衛殿じゃ……」

奥田は、よろよろと歩き出した勝利者の方を指さした。

「うーん、そういえば確かに……」

高田はうめきに似た声を上げた。中山安兵衛なら堀内道場の同門であり、何度か稽古の木刀を合せた仲である。決闘の現場に来た興奮と相手の表情の凄じさのために、今まで気付かなかったのだが、いわれて見れば確かにそうだ。

「これは一つ、祝いの言葉をかけてやらねばなるまい」

高田と奥田は、そんなことをいい合いながら土手を降り、人垣の後を廻って安兵衛の出て来る方へと急いだ。

二人が西の土手の北はずれまで来た時、見物人の人垣が揺れ、拍手が湧いた。若党二人に瀕死の

菅野六郎左衛門を載せた戸板を担がせて、中山安兵衛が出て来る所だ。
「中山氏、お見事でござった……」
「天晴れ、同門の誇りじゃ、中山殿」
二人はこもごもに声をかけた。中山安兵衛は、一瞬、虚な視線を向けたが、まだ人の顔を認識できるほどの落着きは取り戻していないらしく、
「お医者はおられぬか、お医者は……」
と呟いただけだった。

「高田馬場の決闘」の話は、たちまちのうちに江戸中に拡まった。そしてその瞬間から、事実よりもはるかに華々しいものになっていた。
数時間前に、中山安兵衛が駆け抜けた牛込天龍寺通りの辺りでは、職人や日雇いたちが身振り手振りを混えて大袈裟に話していた。ある者は、
「安兵衛さんは駆け付けるや否や、たちまち二人を斬って捨てた。その速いこと速いこと……」
といい、ある者は逆に、
「じっくりと睨み合った安兵衛さんが、じりじりと相手に迫ったねえ。向うは二人いたが気迫に押されてあとずさりさ」
という。また、ある者は、
「菅野六郎左衛門という老武士がまず眉間を割られて倒れた。村上三兄弟が一斉に斬りかかろうとしたちょうどその時、待て待てっと安兵衛さんが来たねえ。向きをかえて三兄弟が打ちかかるのを

安兵衛さんはひらりひらりとかわしてさ……」
と講談口調で語った。どうやらだれも、本当の斬合い場面は見なかったらしい。だが、どの話も中山安兵衛だけがやたらに強かった点では一致している。
尾鰭は距離と時間が拡がるほど大袈裟になる。芝松本町の日雇い頭前川忠大夫宅では、また聞きのまたまた聞きの話を見て来たように語る者が何人もいた。ここでは、中山安兵衛なる浪人が馬場も狭しとばかりに駆けめぐり数人の敵を次々と斬り倒した、という活劇調の物語になっていた。
主人の忠大夫は、播州赤穂加里屋町の大年寄前川新右衛門の従兄弟で、同業者仲間ではもの識りで通った人物だったが、
「それじゃ近いうちに、みなで牛込へ安兵衛さんとやらを拝みに行こうじゃねえか」
といって、日雇いたちを歓ばせた。
一日も経たぬうちに、浪人中山安兵衛は江戸庶民の英雄になっていた。当然のようにこの人物自身の虚像も生れた。滅法強いというだけでない、腕も立つが文才もある、義侠心にも富んでいるが優しさもある、その上、水もしたたるいい男だ、などという噂が加わって女房たちの興味を掻き立てた。
「高田馬場の決闘」に興奮したのは武士も同じだ。百年の泰平に慣れ、腕を示す機会さえなかった侍たちはみな、中山安兵衛の働きを賞賛した。浪人たちは、その好運をうらやみつつも「中山氏にあやかりたいものだ」と語り合っていた。中には、
「拙者とて左様な機会にめぐり合えば中山氏とやらに劣るものではないが……」
と腕を撫す者もいた。しかし、この有名人に挑戦して勇名を轟かせようとするほどの乱暴者はい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com